ハードな知識とソフトな知識

滋賀大学経済学部　近藤 豊将

知識や技術は、次の二種類に大別できるように思う。

一．即効性はないが、時間が経過しても価値が減りにくいもの。

二．即効性があるが、時間とともに価値が急減してしまうもの。

ここでは、便宜（べんぎ）上、前者をハードな知識、後者をソフトな知識と呼ぶことにする。以下の議論は、「知識」を「技術」に置き換えても、ほぼそのままあてはまるだろう。また、「論理的思考力」のような狭義（きょうぎ）の知識や技術とは異なる知的能力も、ハードな知識に含めて考えることもできよう。

さて、ハードな知識の典型例としては、微分積分学が挙げられる。それは、習熟するまでにある程度時間が必要な反面、三十年後も、またおそらく百年後も、今と大差ない重要性を保持していることだろう。（勿論、パソコンの普及などに伴い、計算技術よりも理論面に教育上の重心が移るなどの変化はあるだろうが。）手前味噌だが、現代経済学の分析方法も、数学理論に負けず劣らず、時代の風雪に耐えうるものだと思う。

ソフトな知識の代表例は、時事問題である。スポーツニュースなどは、即座に話題にできて重宝するが、三日も経てばほとんど誰からも見向きもされない。新聞誌上を騒がす政治経済の話題も、微分積分学や一般均衡理論（現代経済学の中核的な一分野）に比肩（ひけん）するほど長命なものはほとんどないはずだ。

昔の大学における研究と教育は、ハードな知識に関するものが中心だったとは言えないだろうか。私の学生時代でも、「すぐに役に立つ」ということが、大学でさほど尊重されていた気がしない。また、数理経済学のようなハードな知識を扱うゼミにも、それなりに学生が集まっていた。

現在は、ハードな分野は、受難の時代のように思われる。数理経済学でゼミを開いても、希望者はおそらくほとんどいない。学生の忍耐力の減退がその一因だろうか。上でも触れた通り、そのような分野は、自らの血肉となるまでに一定以上の消化・吸収期間が必要なのである。

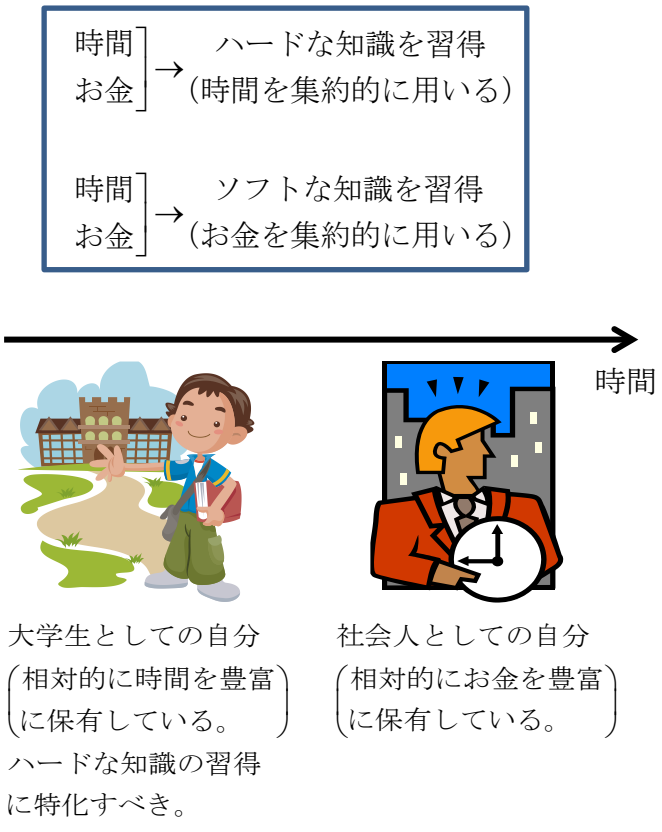
代わって、消化の良いソフトな知識がもてはやされているようだ。最近の趨勢（すうせい）として、企業は即戦力を求めている。経済全体が成長していた時代は終わり、企業も組織内部で社員を教育するだけの余裕がないからなのか。また学生も、資格の取得など、目に見える成果をより直接的に求めがちだ。

だが若いときには、ハードな知識の習得のためにも、ある程度は力を注ぐべきである。上の定義からも明らかな通り、ソフトな知識は寿命が短いからだ。大学で四年かけてソフトな知識を勉強

しても、三年後には役に立たなくなるのではもったいない。国際経済学でよく知られているヘクシャー＝オリーンの理論によると、「大学生としての自分」は、「社会人としての自分」と比較して、（お金よりも）自由時間を豊富に保有しているので、時間を集約的に用いるハードな知識の習得に特化するのが効率的である。（ソフトな知識の習得には、社会人になってから多くの時間を投入すればよい。下の図も参照せよ。）また、昔と比べて時代の変化が速いという事情もある。そのような環境下で、今後約四十年間にわたって生産的に仕事をしていくためには、時間のあるうちに、ソフトな知識だけではなく、時間耐性のあるハードな知識にも十分に投資しておくべきだ。

こうして、我々大学人は、ひとつのジレンマに直面することになる。一方で、大学は今後もハードな知識の研究と教育に対して手を抜くべきではない。他方で、ハードな知識を生かじりさせようとしても、少なくない学生は食わず嫌いである。

このジレンマを解決するために我々ができることは、ハードな知識を食べやすいように、また早くエネルギーになるようにうまく料理することだろうか。私が授業の副読教材としてコラム集を用意しているのは、そのような問題意識に基づいている。（「魂のコラム集」を参照のこと。）また、ハードな知識は栄養価が高い（長期的に役に立つ）ことを学生に納得してもらうことも有効だろう。大学での勉強が将来どのように自分の役に立つのかを、なるべく考えさせるようにしているのはそのためである。（「双方向推論法」を参照のこと。）

日暮（ひく）れて道遠し！　手ごたえありとはとても言えないが、方向性としては悪くないと信じることにしておこう。

（平成二十五年十二月二十八日）